



東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター
The Newsletter **CNEAS**

第 39 号

● 目次 ●

巻頭言：モンゴル訪問から	1
東北アジア研究センター公開講演会・企画イベント トナカイとラクダが誘う知の旅	2-3
「ロシアにおける電磁波規制と関連技術」に関する講演会	4
センター研究会	5
シベリアだより	6
新任教員紹介	6
客員教授紹介	7
客員研究員紹介	7
活動風景：一般公開展示「中国・朝鮮国境の大活火山 白頭山の謎」が開催されました	8
編集後記	8

巻頭言 **モンゴル訪問から**

東北アジア研究センター長 瀬川 昌久



昨夏、生まれて初めてモンゴル国を訪問しました。モンゴル科学アカデミーやモンゴル科学技術大学など、協定締結先の諸機関からの招きにより、本センターモンゴル・中央アジア研究分野の岡教授を案内役に、同国での研究を検討中の鹿野・上野両准教授、それにセンター長の私の4名で訪問団を組み、7月23日より4日間の予定で訪れたものです。

私にとって、モンゴルはもとより、牧畜を生業としてきた地域へ足を踏み入れるのはこれが初めてでした。とはいえ、文化人類学を専門とする関係上、学生時代以来人類の主要生業パターンの狩猟採集／牧畜／農耕のひとつとして、牧畜についての知識や理論をいろいろと学ばされてきましたし、大学で担当する授業では、「アフリカの牧畜社会では～」とか、「モンゴルの牧畜の特色は～」とか、毎年のように講義もしてきました。また、本センターの同僚を通じ、モンゴルについての予備知識は日常的に耳に入っており、少なくとも知識としてはモンゴルについてはかなり「物知り」な状態になっておりました。

そうしたこともあって、実際にウランバートルの空港に降り立ってみても、それほど大きな違和感や「カルチャーショック」はありませんでした。私には読めないキリル文字を主とする看板も、街の郊外に点在する円形の住居・ゲルも、あるいは透明感のある青い空や家畜の群にしても、

大方は予想の範囲であり、また、羊を主体とする肉類中心の食事も、中国の内モンゴル料理として食べたことのあるものに似通っていましたので、新鮮な驚きというよりは、一種の「既視体験」のような感覚がありました。もちろんそれは、同行してくれた岡先生の行き届いた案内のせいもありますが。

そうした中で、それまでは考えもしなかった感覚として強く心に残ったのは、土地というものの広がりです。単にモンゴルの土地がゆったりと広い、ということではなく、土地に境界や区切りがないのが常態であるという点です。日本でも中国の農耕地帯でも、土地は柵、道路、水路、樹木など何らかの仕方で区切られ、区切られた土地こそが利用されている土地、生きた土地であり、区切りがない土地は未開発か放置された荒地地なのですが、牧畜を生業の基盤としてきたモンゴルでは、柵のような境界は家畜の移動の障害になるだけであり、区画されない土地、開放された土地こそが牧草地としての価値をもつ、生きた土地なのです。おそらくそれは、農耕を基盤とする社会と牧畜を基盤とする社会の基本的な価値意識の違いに対応したものでしょう。訪問先の某大学の学長さんが、オオカミの習性について熱弁を振るわれていたことなどと併せ、やはり普段私がフィールドにしている農耕社会とは異質な社会なのだ実感しました。

トナカイとラクダが誘う知の旅

12月はセンター恒例の公開講演会の季節である。今年度は関連イベントとして写真&民具展も実施された。東北アジア研究センターの文化人類学グループが中心となったこれらの企画を通して、多くの仙台市民に、人類学の視点からのシベリア地域研究のおもしろさと可能性を伝えることとなった。

12月6日午後に東北大学片平キャンパスさくらホールで実施されたのは、講演会「シベリア アフリカ、トナカイとラクダの遊牧民」である。シベリアはロシアの一部でもあるが、その先住民文化は狩猟採集や遊牧などを通して環北極圏や内陸アジアとつながりをもっている。今回の講演会では、そうした文化史的な関連とともに、さらに異なる東アフリカの牧畜民との比較を試みた。アフリカとの組み合わせによって、これまでにないシベリア像を提示することができればと考えたのである。

当日は、弘前大学人文学部准教授の曾我亨氏による「ラクダ牧畜民ガブラの生業文化と社会」、そしてセンター准教授の高倉浩樹による「トナカイ牧畜民エヴェンの生業文化と技術」の二つの講演がそれぞれ45分づつ行われ、休憩を挟んで、センター長かつ人類学者でもある



熱心に話を聞く公開講演会の参加者

瀬川昌久氏を交えた鼎談が30分という形で実施された。

地誌や民族・歴史的概況、寒冷地と乾燥地という全く異なる環境条件のなかで家畜に依存して生活を成り立たせるあり方、そしていづれも現在の国民国家世界にあっては民族的な少数者として「周辺」を生きる人々—これら三つの点に着目しながら、シベリアとアフリカの遊牧民それぞれの特徴が講じられた。社会主義を経験した遊牧民と、現在民族紛争によって難民化した遊牧民はその歴史・現状において大きく異なっている。とはいえ、家畜を基盤として成り立つ社会の基層文化には共通する多くの側面があるのも事実であった。

当日は講演会会場となりのホワイエ（廊下）部分に、パネルを立て、東北アジア研の紹介パネルおよびシベリアやアフリカの民俗写真の展示も行われた。風の冷たい土曜日だったにも関わらず90名近い来場者があり、従来にない賑わいとなった。おそらく、今回の講演会はアフリカを巻き込むことで、新しい市民の関心と呼んだのではないかと思われる。

* * *



公開講演会で鼎談する瀬川氏、蘇我氏、高倉（左より）

講演会の実施から程なくして12月12日（金）から14日（日）には、仙台メディアテークの5階ギャラリーにて「<見る、さわれる、知の旅>トナカイ！トナカイ！！トナカイ！！ 地球で一番寒い場所での人間の暮らし」が行われた。この突拍子もないネーミング企画の正体は、シベリア先住民族の写真・民具の展示会であった。先の公開講演会と併せて、文化人類学の研究成果に基づいたシベリア先住民世界を、映像とモノを通して広く市民に理解してもらうことを意図するものであった。

折しも仙台名物のクリスマスイルミネーション「光のページェント」と重なり、またテレビ・新聞も巻き込んだ積極的な広報活動の効果があったのか、3日間で1045人という驚異的な来場者を記録した。

企画者の高倉が1994年以降の現地調査で収集してき

た民族標本（民具）および民俗写真を利用した、子どもから大人が楽しめる参加型の展示会というのが趣旨である。日本に暮らす者にとって遊牧という生活様式、家畜群という存在、さらに毛皮の民具はなじみが薄い。それゆえに、トナカイという動物の存在感や民具の素材感をさわってもらおうと思ったのである。

会場の入り口には縦3m横2mの巨大ポスターを貼り、中にはA0からA3サイズまでの写真97点、毛皮の民族衣装など37点、説明パネル6点を設置した。シベリアの森林を復元するために遠刈田温泉で伐採した木立を立て、模型の天幕や櫓をおくとともに、実寸（に近い）トナカイパネルを20頭分近く立てて群れの雰囲気をも復元した。加えて調査地でフィールドワーカーが何を見て何を感じたのかメモ書きのような、つぶやきのようなものを約30の短冊に筆書きし木立に吊した。また、大学の研究室を復元することで、調査地と大学研究室との、いわば人類学者にとって通常実践している「旅」を、来場者に再体験してもらうことを考えた。来場者が、展示という異空間を積極的に体験しながら、展示対象となった人々に対して共感性を高めた上で、シベリア先住民の文化と現在について知識を得てもらうことねらったのである。

このような展示が可能だったのは、職業写真家であり、東北アジア研究センターリサーチフェローでもある斎藤秀一氏の協力があればこそだった。彼は写真制作の技術を担っただけでなく、漫画家で町おこしプロデューサーの千葉真弓氏、空間プロデューサーの千葉義人氏をこのイベントに巻き込んでくれた。こうした大学外のプロと、文学研究科の久保田亮助教、情報科学研究科の牧野友紀助教、院生の朝山慎一郎君と兼城糸絵さん、学部生の三浦達尋君と澤野正樹君、センターの徳田由佳子助手とでチームを作ることとなった。



異業種格闘というべきワークショップをくり返す中で展示内容・構成さらに広報戦略が練り上げられ、果てまたさらなる人的ネットワーク（手度組）が広げられていったのである。

研究成果を学生や異分野の研究者そして大学の外のプロや市民と共有することは激的にたのしい、というのが今回得た感想である。異業種間のセッションとでもいうべき濃い時間が半年に及ぶ展示準備の中でゆくりと蓄積されていったとすれば、三日間の展示期間は、見知らぬ市民が次々に飛び込んできて熱く語り合っている唐突な時間の反射であった。その媒体となったのは、民俗写真と民族標本といういわば生の研究資料がもつ力である。展示したのは、素材の力それ自体と、そして研究者がその素材と取っ組み合う研究のプロセスである。この二つが多く多くの市民の喚起力をたきつけたことは間違いない。私自身がその形成に関わると同時に大きな影響を受けたのは、このような意味での研究と社会の新しい臨界のようなものだったのではないか、と今は思っている。

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/dse/takakura/tonapuro/index.htm>

文 @高倉浩樹
写真@斎藤秀一



会場内の復元天幕とソリ。バックは写真。



実寸大トナカイパネルと民具

● 講 演 会 特 集 ●

「ロシアにおける電磁波規制と関連技術」に関する講演会

佐藤 源之

電磁波は携帯電話やテレビ放送など我々の生活に無くてはならない存在です。一方、パソコン、テレビ、電子レンジだけでなく、自動車のエンジンなど電気・電子工学技術を利用するあらゆる機器は電磁波を放射しています。電子機器から放射される電磁波が他の電子機器に対して予期せぬ影響を与えることが危惧されます。このような問題を解決するのが環境電磁工学(Electromagnetic Compatibility: EMC)です。また電磁波が生体に影響を与えることの評価もこうした研究の一部です。日本のEMC研究の中心となっている電子情報通信学会EMCJ研究会は昭和52年(1977年)に東北大学研究グループが中核となり設立され、東北大学におけるEMCの研究の歴史も「EMC仙台ゼミナール」を中心に30年がたちました。日本におけるEMC研究は今日の我が国における電子通信機器産業の発展に大きな役割を果たしてきましたが、EMCの国際的な研究では旧ソビエトの電波ばく露基準が、欧米や日本における基準に比べ大変厳しいかったことが良く知られています。しかし1990年代以前、旧ソビエトの研究者との交流は少なく、またソビエトの規則がどのように作られてきたかなどを知ることはできませんでした。そこでロシアから電磁波の人体への影響などについて長く研究に携わってきたロシア人研究者を招聘し3回の連続した研究会を東北アジア研究センターが開催いたしました。
<http://cobalt.cneas.tohoku.ac.jp/users/sato/EMC-ISTC.htm>

- 10月22日(水) 東北大学 東京分室 参加者46名
- 主催 ISTC 協賛 東北大学 東北アジア研究センター
- 「第45回ロシア先端科学技術に関するISTC Japan Workshop : ロシアにおける電磁波規制と関連技術」

ロシアの電波ばく露基準に関する技術的解説していただくと共に、現在のロシアにおける環境電磁工学技術の紹介、研究活動、企業化などの現状を紹介していただきました。主催者ISTC (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/technology/istc_1.html) は旧ソ連の研究者と日米欧の研究者、企業との共同研究を推進しています。今回も企業からの多くの参加者があり共同研究などへ結びつけるための情報交換を行いました。

- Valentina Nikitina (St.Petersburg State Marine Technical University) Electromagnetic fields on board ships. Assessment of danger for the crew, hygienic regulation, Russian experience in protection from EMF”.
- Nikolay Khokhlov (Limited Liability Company NANODIAGNOSTIKA) Quasistatic electromagnetic tomography methods and its applications developed in the Institute for Radioengineering and Electronics(Moscow, Russia)
- Nina Rubtsova (Research Institute of Occupational Health of Russian Academy of Medical Sciences) EMF Hygienic standardization in the Russian Federation and prospects of its harmonization with international
- Alexander Worshevsky (ELEMCOM) EMC Standardization and activities in Russia
- Nikolay Chubinsky (Moscow Institute of Physics and Technology) The electromagnetic field probe for registration of ultra wideband pulses

- 10月24日(金) 米沢(山形大学) 環境電磁工学研究会(EMCJ)・マイクロ波研究会(MW)
- 共催 電子情報通信学会 マイクロ波研究会, 環境電磁工学研究会(EMCJ)、IEEEEMCS 仙台チャプタ

本研究会では招聘ロシア研究者に招待講演をお願いし、大学等の研究者との交流を深めました。

- 10月25日(土) 仙台国際センター 参加者28名
- 共催 東北大学東北アジア研究センター、ISTC、仙台EMC研究センター推進部会
- 「ロシア・旧ソビエトにおける電波ばく露基準とロシアにおける環境電磁工学技術」

本講演会では旧ソビエトと現在のロシアにおける電波ばく露基準に関する技術的、歴史的背景を解説していただくと共に、日本での考え方についても紹介をいただきました。本講演会では仙台EMC研究センター推進部会やEMC仙台ゼミナールの協力をいただき、仙台を中心にEMC研究に関わる企業、大学からの研究者にお集まりいただきました。

開会挨拶
 東北大学名誉教授 佐藤利三郎

- 首都大学東京大学院 多氣 昌生 教授
 電磁界曝露に関する日本の防護指針とICNIRPガイドライン
 Japanese guidelines on human exposure to EMF and ICNIRP guidelines
- Valentina Nikitina (St.Petersburg State Marine Technical University) Experimental bioeffects of chronic radiofrequency EMF
- Nikolay Khokhlov (Limited Liability Company NANODIAGNOSTIKA) Quasistatic electromagnetic tomography methods and its applications developed in the Institute for Radioengineering and Electronics (Moscow, Russia)
- Nina Rubtsova (Research Institute of Occupational Health of Russian Academy of Medical Sciences) Power frequency electromagnetic fields: biological effects, hygienic standardization, methods of control and protection. Experience of Russia
- Alexander Worshevsky (ELEMCOM) EMC standardization in Russia
- Nikolay Chubinsky (Moscow Institute of Physics and Technology) The shaper of high-voltage ultra wideband pulses for an exposition of cellular tissues



東京 講演会風景

センター研究会

● 「比較移民研究会」 第2回研究会

移民の学際的な比較研究を目指す本ユニットでは、2008年12月20、21日の両日にわたって比較移民研究会を開催し、前回同様に学内・学外あわせて30名近くの研究者が参加した。「移民の自助組織—過去と現在」という今回のテーマにそって行われた研究発表は、浅川晃広（名古屋大学講師）「在日中国朝鮮族の実態と意識」、木曾恵子（京都大学大学院・博士課程）「東北タイ農村における女性の出稼ぎ実践の変遷—グローバル化時代の女性労働の動態」、園田節子（神戸女子大学准教授）「移動社会の形成・管理・情報伝達—19世紀後半の南北アメリカ華民コミュニティを例に」の3本である。いずれも知的な刺激に満ち、各発表後や懇親会の席においても談論風発、参加者全員を巻き込んだ実のある討議を行うことができ、

終了後には各自、新たな問題意識と課題を持ち帰ることができた。

（李仁子・瀬川昌久）



● 東北アジア研究センター研究紹介発表会

2008年9月29日（月）10:00～16:45、川北合同研究棟大会議室において開催された。研究紹介発表会は、センターの研究者の個人研究について紹介する目的で毎月1名ずつ行われているが、1年間で紹介できる人数に限りがあるために、今回初めての試みとして1日をかけて発表することになった。今回の発表会では次の11の研究紹介の報告が発表時間20分と質疑応答10分で行われた。発表題名と紹介者は以下の通りである。（鹿野秀一）

- ・アジア商人の商業ネットワーク（塩谷昌史）
- ・シベリアのポテンシャル～ロシア科学アカデミーシベリア支部を中心に（徳田由佳子）
- ・湿地生態系の安定同位体比による食物網の研究（菊地永祐）
- ・分子系統解析による微生物群集構造（鹿野秀一）
- ・白頭山、10世紀巨大噴火以降の噴火史の再検討（宮本 毅）
- ・ノア画像から中国越境大気汚染の抽出（工藤純一）
- ・清代モンゴルの社会構造と清朝統治の性格に関する再検討（岡 洋樹）
- ・「言語接触」の観点から見た「言語変化」について（柳田賢二）
- ・日本と中国の真作・模倣観—古書画の世界—（磯部 彰）
- ・1930年代後半ソ連極東の鉄道政策（寺山恭輔）
- ・牧畜から狩猟への生業転換とエスニシティ：ヤクーチア北西部の環境と開発（高倉浩樹）

● 東北アジア研究センター第1回学生研究交流会を開催

本センターでは、文系・理系の様々な分野の学生が東北アジア地域に関連する研究活動を行っている。従来、本センターでは定期的に教員の研究発表会を行ってきたが、学生はセンターの所属研究室と所属学部に関連研究室とを往復しながら研究を進めていて、センターの他の研究室の学生がどんな人で、どんな研究をしているのか知る機会がなかった。そこで、センター内の「風通し」をよくし、毎日玄関や廊下で会う学生・教員が互いに言葉を交わす雰囲気づくりを目指して、研究推進委員会（佐藤源之委員長）がこの交流会を行うことを提案し、センター教員全体の賛成を得て、2008年10月20日に実施した。まず、14時から川内北キャンパスA-101講義室で口頭発表12件（各15分間、

計3時間）を行い、17:30頃からセンターの436会議室でポスターセッション（20件）、そして18:30頃から同室で懇親会を行った。センターには学部4年、修士、博士、ポスドク合わせて67名の学生がいるが、その約半数（33人、外国人留学生5人を含む）が発表し、教員を含めて記名した参加者は54名であった（実数はもっと多かった。会場でプログラム・要旨集を配布）。「中国中世の鬼神観」、「漢族の婚姻儀礼」、「清末内モンゴルの墾務局」から「水田季節変化モニタリング」、「公共施設最適配置」、「オオクチバス当歳魚の餌資源」、「伊豆大島溶岩流の表面形態」まで、様々な興味深い話を聞くことができ、交流の輪が広がった。

（学生研究交流会担当：石渡 明）

シベリア便り

昨年、ロシア科学アカデミーシベリア支部細胞・遺伝学研究所と核物理研究所が共同で、ある薬を開発しました。血栓を溶かす薬《トロンボヴァジム》です。ロシア連邦統計局が1992年から2007年までの人口の死亡原因をまとめたデータで見ても、血液循環系疾患による死亡率は癌による死亡率をどの時代も上回っています。タバコが原因と思われる呼吸器系やアルコールなどが原因と思われる消化器系の疾患もありますが、高血圧、心筋梗塞、動脈硬化、脳梗塞などとは比較にならない程度ようです。ロシアの気候は厳しいもので、我々と比べてタダでも不利な環境に感じられますが、彼らはメタボリックへの道をひた走るような食生活をし、更には推奨している面さえあるのですからデータのような結果が出てしまうのは仕方のないことにも思えます。最近、若い世代はスリムな体型を維持しようと甘いものや油ものを控える傾向にあるようですが、もちろん「シベリアの厳しい気候を乗り切るためには脂肪をつけなきゃダメ！」という従来の考えの人も少なくありません。別に室外に住んでいるわけでもなく、集中暖房が完備されている室内では半袖で過ごせるくらい暖かいわけで、まして多くの人々は倒れたり病気になった後には医者から油、糖分、塩分、酷い場合には蛋白質の摂取まで制限されてしま

うのですから、そこに至るまで身体に脂肪を蓄える必要性は正直感じられません。恐らくこの考えが根強いのは、健康には良くないと薄々感じつつ、彼ら風の食の楽しみ方を正当化するためなのでしょう。

そんな人たちにとって正に救世主的な薬が開発されたのです。これさえ飲んでいれば、最も恐ろしいと言ってもいい血液循環系疾患の予防になるのです。開発当初、また生産が開始されてからロシアのメディアはこぞってこの薬に関して報道したようです。どの程度の効果があるのか私自身は確認しておりませんが、シベリア支部でも代表的な2つの研究所による共同開発です。自信作に違いありません。どなたか《トロンボヴァジム》をお試しになりませんか？

(徳田由佳子)



ロシア科学アカデミーシベリア支部核物理研究所

◆ 新任教員紹介 ◆

平野 直人 助教

2008年12月に地球化学研究分野の助教に着任しました平野直人です。山形大学を卒業後、筑波大学大学院を修了し、その後は東工大、カリフォルニア大、東大、金沢大と、様々な大学をポスドクとして渡り歩き、この度ようやく東北アジア研究センターへたどり着きました。毎年のように引っ越しをしたことはとても大変で面倒でしたが、素晴らしい経験がありました。それは、様々な分野の研究者とふれ合い、学び合えたことです。そして、自分の研究分野枠にとらわれず学際的な研究を行っていくことの重要性を強く感じました。東北アジア研究センターは、そうした学際的な研究活動が行える場所です。僕がこれから分野が異なる研究者の皆さんから多くを学び、議論することでどんな新しい研究のアイデアが生まれるのだろうか？と考え、今からワクワクしています。

これまで僕は、三陸沖の太平洋プレートで活動する海底火山を研究し、それが今まで地球上で知られていた火山発生メカニズムのどれにも当てはまらない新種の火山であることを突きとめました。そして現在、調査海域をトンガ沖

や日本海、南米チリ沖など、全世界の深海底に広がっています。またそのような火山は西南日本や北海道、台湾、極東ロシアなどの陸域にも存在していることもだんだん分かってきました。これらの地域の調査を進める予定です。

仙台での生活は僕にとって山形で生活した大学生時代から数えて十数年ぶりの東北生活でもあります。まだ新生活に慣れていませんが、冬の寒さや雪道の運転など、だんだん大学当時(大昔)の生活を思い出し、楽しくなってきました。趣味はテニス、旅行、古代史、そして食べることです。仙台でおいしいもの、おいしいお店があれば是非教えてください。



◆ 客員教授紹介 ◆

ブラック ジョン アンドリュー 教授

2008年11月1日より、2009年3月31日まで、オーストラリアシドニー大学のブラック教授が、客員教授として滞在されています。

先生は、交通工学および交通計画の分野の世界的な研究活動をリードし、世界交通学会（World Conference on Transport Research Society）の常務理事のほか、アジア交通学会、太平洋海洋科学技術会議（PACON）などの国際学会の学術委員、Environment and Planningなどの国際学術雑誌の編集委員を務めておられます。また、交通計画コンサルタントの実務経験もあり、アジア諸国の大学への短期滞在を活用して、各国の実証的な研究、学生指導、および北京オリンピックの交通処理計画をはじめとする実務へのアドバイスなどの実績が豊かです。わが東北アジア研究センターにおいても、1999年に客員教授として在籍され、宮本和明教授との共同研究のほか大学院工学研究科の学生指導にも当たっていただきました。

先生の最近の関心は、公共交通を軸とした都市の再編方法や、気候変動問題に対する都市の対応策と回避策です。日本はアジアの諸国の中でも最も早く少子高齢化を迎え、また気候変動問題への技術的な対応能力も高い国です。今後東北ア

ジア諸国での都市の政策を考えていく上では、社会的な問題解決を日本が積極的に開発し、提案していく必要があります。

先生は本センターの滞在中に、今後の共同研究の方向性を踏まえて、アジア諸国の気候変動と都市政策上の対応に関するデータ収集、日本の都市政策のヒアリング調査などの研究活動を進めておられます。また、2009年3月下旬には、公共交通指向型都市開発（TOD）のセミナーを、学内で開催する予定です。

先生は1999年の滞在以来、芭蕉に特に関心を持ち、その後日本語の習得も進めておられます。休日には、松島や山寺などの「奥の細道」を歩きながら、俳諧の心を感じ、さらに墨絵にも挑戦されておられます。今回の客員教授の期間を超え、引き続き研究協力関係が構築できるものと期待しています。

（奥村 誠）



ステムラー フロリアン 准教授

フィンランド国ロヴァニエミ市にあるラップランド大学北極センターから来ました。東北アジア研究センター客員准教授として、2009年1月から7月までの約半年間仙台に滞在することになります。専門は社会人類学、とくに北方人類学です。ロシア北極圏に暮らすトナカイ遊牧民・狩猟漁民さらに資源開発労働者のあいだでフィールドワークを行ってきました。最も主要な調査地は、西シベリアのヤマロネツ人およびヨーロッパロシア北部のネネツ人です。調査の経験から、人間の移動や居住、遊牧、人—動物関係、さらに産業開発や技術変化が社会と文化に及ぼす影響を与えるかといった理論的関心を持つようになりました。ソ連崩壊後のシベリアのトナカイ遊牧先住民の多くは経済混乱のなかでトナカイ飼育

業は崩壊しました。しかし、私の調査するネネツ人はそうではありませんでした。この理由の一つは彼らが蓄積してきた家畜との関係にあると考えています。日本滞在中にはこの人—家畜関係に関わる比較民族誌的研究を進めるつもりです。この研究領域にかかわる日本の人類学者や関連する専門家と積極的な交流をしたいと思っています。



ネネツ人の民族衣装マリツァを着てフィールドワーク中の著者

◆ 客員研究員紹介 ◆

ステムラー=ゴスマン アンナさん

フィンランドのラップランド大学北極センターから来ました。専門は北方人類学。とくに北部ノルウェーからヨーロッパロシア北部そしてカムチャッカ半島までのユーラシア北極圏が調査地域です。現在取り組んでいるのは、2つのテーマです。一つは気候変動が人の社会文化に与える影響についての人類学です。洪水や土壌浸食の被害にある極北地域のコミュニティの脆弱性と適応について研究しています。この課題は、国際極年委員会のプロジェクトでもあります。もう一つのテーマは、グローバル化と国境貿易に関わる人類学的研究です。特にフィンランドとロシ

アの国境間でのいわゆる「担ぎ屋」に焦点をあて、その商活動や彼らが当該社会にもたらす社会文化的影響を調査しています。日本にいる間には、日本とロシアの間の中古車貿易なども人類学的観点から調査したいと考えています。2009年7月までの半年間東北アジア研究センターの客員研究員として滞在します。



グリーンランドの氷河をバックにして (2008/8)



一般公開展示 「中国・朝鮮国境の大活火山 白頭山の謎」が開催されました

東北アジア研究センター 助教 宮本 毅

2008年10月7日から26日までの20日間、仙台市科学館にて本センターと東北大学総合学術博物館、ならびに仙台市科学館との主催で企画展示「中国・朝鮮国境の大活火山 白頭山の謎」が開催されました。この展示は2000年に共同研究「中国東北部白頭山10世紀巨大噴火とその歴史効果」として開始し、現在の共同研究「白頭山東部における10世紀巨大噴火と遼・高麗王朝への歴史的影響」に至る白頭山関連の共同研究の成果を一般向けに公開したものです。

白頭山（中国名：長白山）は中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の国境上に位置し、過去に何度も巨大噴火を起こしてきた活火山です。この白頭山の活動の中でも10世紀の噴火は、過去2000年間で最大級の噴火ということで、人間社会への影響について興味をもたれてきました。噴火当時、中国東北部では白頭山を中心とした地域に渤海国がありました。この噴火とほぼ同時期に滅亡しています。そのため、1980年代後半に白頭山の巨大噴火が渤海国の滅亡に影響を与えたのではないかとこの仮説がたてられましたが、その真偽は謎のままです。本共同研究はこの謎を解決すべく白頭山の3/4を占める中国側の調査からスタートしました。現地での調査は国境沿いということもあり、行動が制限されるなど様々な困難の中行われましたが、調査毎に新たな知見が得られ、10世紀の噴火の推移・規模といった噴火の全貌が明らかになってきました。また、現地調査から得られた噴出物分布と中国・朝鮮の古文書記録との関係から噴火による影響も分かってきました。渤海国滅亡との関係については、文献の調査からは噴火の時期を決定づける証拠は見つかっていませんが、自然科学的方法による年代測定からは、噴火は渤海滅亡の926年より10年以上後である結果が得られており、現状では白頭山噴火と渤海滅亡の因果関係は低いことが分かっています。この謎以外にも調査を進めるたびに新たな問題点が見つかり、それらを解決すべく現在もプロジェクトは進行中です。このような状況のもと今回の展示が開催されました。展示では、白頭山10世紀巨大噴火がどのような規模で、人間社会にどのような影響をもたらしたかについて、また、現在の白頭山の火山活動状況から今後起こりうる白頭山の噴火活動に対して、われわれがなすべきことは何かについてもふれられています。このような研究結果とともに、

研究・調査の過程において、われわれがどのようにして問題解決をはかろうとし、何がわかってきたのか。また、このような調査研究の中から今後何をなすべきかが紹介されています。展示内容の一部は、総合学術博物館のホームページ (http://www.museum.tohoku.ac.jp/past_kikaku/paekdusan/index.html) に掲載されておりますので、ご興味のある方はこちらを参照していただければと思います。

現在も研究が進行中ということもあり、今回の展示は確固とした結論が示されたものではなく現在考えられる可能性を示したものといたします。なかなか結論にたどりつけない理由のひとつとしては北朝鮮側の情報が不十分であることが挙げられます。2005年に数日間ではありますが、北朝鮮での調査も実施し、これから本格的な調査に乗り出そうとした矢先での朝鮮によるミサイル発射・核実験によって、その後の調査は実施されぬまま今日に至っています。われわれは北朝鮮での調査が可能になれば、すぐに調査を開始できるよう準備を続けており、今後状況が好転することが望まれるところです。朝鮮において調査・研究を行うことによって、白頭山噴火の謎を解決するための鍵が得られるのかどうかは、研究者としての純粋な興味のもとにあります。しかしこれに加えて、白頭山の噴火は日本を含む周辺国に影響を及ぼす可能性が高いことから、これまで共同研究を行ってきた日中韓以外にも北朝鮮を含んだ国際的な協力関係のもと、白頭山について理解を深めることは重要なことだと考えられます。

現在、今回の展示内容について、全国火山系博物館の巡回展として2009年度以降に全国数カ所の火山博物館において開催されることが検討されておりますので、その場合にはぜひ実際にご見学いただければと思います。この展示を通じ、白頭山は日本人にとって遠いなじみのない地ではありますが、噴火が発生した場合には少なからず日本にも影響を与えるる活火山であることを認識していただけると幸いです。



編集 後記

今号は、公開講演会や研究会など秋から年末にかけて行われた行事についてお伝えしました。今年初めての取り組みも幾つかあり、いずれも知的交流の場として数々の成果が得られたのではないかと思います。今年後もセンターの活動にご注目ください。
(徳田由佳子)